

「NEW江戸取」としての改革を加速

世界に挑む、リーダー型人材を育成

「規律ある進学校」として、東京大学や医学部、難関大学へ多くの卒業生を輩出する江戸川学園取手中・高等学校。「NEW江戸取」をキーワードに掲げて改革を進める近年は、世界に通用するリーダーの育成をめざした海外研修にも力を入れている。道徳教育を土台に、生徒が主体的に取り組む多彩なプログラムを展開する同校の教育について、竹澤賢司校長にお話を伺った。

海外研修やアフタースクールなど多彩なプログラムで主体性を育む

新しい時代に向けて改革を進める江戸川学園取手中・高等学校の大きな目標の一つは、グローバル化への対応だ。世界に貢献できる人材を育成するために、海外研修の多様化・充実化に積極的に取り組んでいる。

2018年から始まった「SDGsスタディーツアー」カンボジア・ベトナム」は、現地の貧困や飢餓などにつ



実際に現地の小児病院や孤児院を訪れ、発展途上国の現状を学ぶSDGsスタディーツアー（カンボジア・ベトナム）

いて主体的に学ぶ課題解決型の海外研修プログラムだ。昨年は、中高24名の生徒がカンボジアのアンコール小児病院・孤児院の見学などを通じて、発展途上国の現状について学んだ。

研修では、専門家を招く「事前学習」から「現地学習」「事後学習」を通じて報告書や小論文などが課される。例えば、現地での中間報告書では、ある生徒が「インターネットや新聞で調べていたが、想像以上の貧困状況を目の当たりにして、自分の未熟さを痛感しました」と記すなど、新たな気づきを確認する場となっている。竹澤校長は、「現地でさまざまなことに触れることで、驚きや躊躇、罪悪感など高いレベルでの問題意識が芽生え、それが自ら主体的に考える力の育成へとつながっています」と話す。

道徳教育で心の「かたち」をつくり互いに切磋琢磨していく

新しい取り組みや多彩なプログラムの根幹にあるのが、創立以来重視し続けている「心の教育」だ。同校では「心力」「学力」「体力」のバランスがとれた三位一体の教育を実践するなか、「心力」を培う場として「道徳」の授業に力を注いでいる。その理由を竹澤校長は、「多様化の時代だからこそ、道徳を通じて心の『かたち』をつくることを大切にしています。きちんとした『かたち』があってこそ、自主性や柔軟性を備えた心豊かなリーダーになることができます」と説明する。



講話を聞いた後は、グループでじっくり話し合い、最後に自分の考えや感想を書き上げる

道徳の授業は、校長・副校長・部長教師が生徒に「講話」を行い、その「講話」をもとに生徒が議論し、感想文を提出するという内容になっている。竹澤校長は中1生に年6回講



校長 竹澤 賢司 先生

東大推薦入試に4年連続合格「Sakura Arena」も完成へ

好調な進学実績や「心の教育」などに対する評価を背景に、同校への関心は高まる一方だ。2020年度は茨城県を中心に広く首都圏各地の小学校164校から233名が中等部に入学する。また昨年は、「医科ジュニアコース」に特化した説明会を茨城県水戸市

にとっては、アメリカの最前線での医療研修を通じて「自分の考えを伝えることの大切さ」に気づくなど、コミュニケーションの重要性を理解し、医療への関心を高める貴重な機会となっている。

「海外への研修は、今後もさらに深化させていきます」と竹澤校長。同校では新たな海外研修の試みとして、来年から中3・高1を対象に3カ月間のオーストラリア短期留学を実施する。「人数を10名以内に絞り、参加する生



UCSD医学教授による特別医療講話 UCSD腎臓臓器移植外科部長 By. Dr.Mekeel

や東京・四谷、千葉県・新浦安の3カ所で開催。これにより「医科ジュニアコース」の受験生が増加したという。

小学校からの一貫生の入学によって募集人数が狭まり、厳しさが増す同校の中学入試だが、難関を突破した中学生の意欲は高い。竹澤校長は「今年度は東大ジュニア、医科ジュニアコースにスライド合格制度を利用して、何度も挑戦する受験生が目立ちました。粘り強く、目的意識の高い生徒ばかりです」と話す。

スライド合格制度とは、中等部に設けられた3コース「東大ジュニアコース」「医科ジュニアコース」「難関ジュニアコース」のうち、「東大ジュニアコース」「医科ジュニアコース」を志望して合格点に達しなくとも、「難関ジュニアコース」の合格点をクリアしていれば、同コースにスライド合格できるといふもの。さらに、スライド合格した生徒は、全3回の入試を利用して、2回目と3回目に「東大ジュニアコース」「医科ジュニアコース」を再チャレンジできる。もちろん、入学後でも成績や本人の意欲次第で、他コースに移ることも可能だ。

「受験勉強に取りかかる時期が遅かったなどの理由で、現段階で学力が及ばなくても、6年間努力をすれば、東大や医学部に合格できる力を養うことができるのです」（竹澤校長）

2019年は、東京大学5名を含めて国公立大学に118名、医学部にも

徒は現地留学のプログラムに沿って学習していきます。これまで短期留学は1カ月以内でしたが、3カ月という期間でさらに多くのことを深く学んでほしいと考えています」（竹澤校長）

海外研修以外にも、生徒の主体性や考える力を育むプログラムが豊富に用意されている。例えば、「アフタースクール」では、英語4技能、理・数融合講座、社会科見学系など150を超える講座を放課後に開講。さらに、教師による60以上の学習系講座も設定されており、生徒は自分の学びたい講座を自由に選択できる。

こうした多彩な教育プログラムは、校外における生徒の活躍にも結びついている。第9回「科学の甲子園」茨城県大会では、同校の生徒たちが第1位を受賞。3年ぶりに栄冠を勝ち取り、茨城県代表として全国大会に出場する。竹澤校長は、「本校には机上の学習以外にも多様な選択肢があり、そのことが生徒の自主性や責任感を高めるのに役立っています」と話す。

77名の合格者を輩出するという進学実績を挙げた。東京大学の推薦入試については、2020年も1名合格したことで、4年連続合格の快挙だ。

茨城県は2022年までに公立中高一貫校を10校増設することを発表している。これに対して竹澤校長は、「従来どおりに『心の教育』を軸にした基本方針を貫きつつ、海外研修プログラムを充実させるなど新しい取り組みを展開していきます。伝統を守る一方で、時代の流れにも柔軟に対応できる点が私学の良さです」と語る。2022年度には、現在の4教科に英語を加えた、5教科入試の実施も予定している。今年4月には、創立40周年事業として工事が進められてきた「Sakura Arena」が完成する予定だ。1階に運動エリア、2階に武道場や卓球場、ダンス室、3階に体育館を備えた総合施設となっている。同校は、引き続き「心力」「学力」「体力」とバランスのとれた教育を加速させていく。



科学の知識やその活用能力を競い合う「科学の甲子園」全国大会への切符を手にした生徒たち



今年4月中旬に完成予定の「Sakura Arena」（完成予想図）

